

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0970101861		
法人名	株式会社ユニマツ リタイアメント・コミュニティー		
事業所名	今泉ケアセンターそよ風		
所在地	栃木県 宇都宮市中今泉4丁目22番1号 電話:028-613-5781		
自己評価作成日	令和 3年 9月 4日	評価結果市町村受理日	令和 3年10月22日

※事業所の基本情報は

基本情報	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php</a>
------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	ナルク栃木福祉調査センター		
所在地	栃木県 宇都宮市 大和 2-12-27 小牧ビル		
訪問調査日	令和 3年10月 4日	評価確定(合意)日	令和 3年10月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

毎月ご家族様に向け、写真いっぱい「そよ風だより」を送付し、イベントでの楽しそうな表情や普段の何気ない表情をお届けしご好評いただいている。また、大きく印刷し各ユニットの壁面に掲示し利用者様にも喜んでいただいている。一緒に「ご利用報告書」を個別に作成し毎月送付している。その月の様子や体調面のご報告をさせていただいている。毎月個別に「個人目標」を設定し体操や家事手伝い等毎日続けられるよう支援している。季節ごとのイベントや誕生会等開催し、楽しみをもって生活して頂けるよう努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成14年開設の2ユニットの事業所で、1階に配置された通所介護と併設で2階に配置されている。「(楽しい・嬉しい・ほっとする)そんな当たり前の感情を持って時間を大切に考え、安全に活きいきと生活出来るように支援する」を理念とし、適時適切な声掛けと傾聴の姿勢に徹し、理念の実践に繋げている。コロナ禍により集団レクが出来ない中、室内での個別レクに力を入れ、ドミノ倒しや塗り絵、パズルなどを一人ひとりの興味に合わせて提供したり、料理教室と称しておやつ作りの機会を増やすなど楽しさを提供している。季節ごとの花を見に出かけるドライブや駐車場で花火やバーベキューなど外気浴を兼ねて気分転換も図っている。運営推進会議は書面による定期開催でメールやFAXで意見交換している。協力医による月2回の訪問診療や随時の往診、週1回訪問の歯科医などは本人家族の安心に繋がっている。毎月発行の「そよ風だより」の内容も充実させ、面会でできない家族へ安心を届けている。併設の事業所と共に地域の高齢者の福祉に努めている事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) (スミレユニット) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価 (スミレユニット)		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	本人の意向にどう沿っていくか、スタッフ間で話し合い共有している。	「(楽しい・嬉しい・ほっとする)そんな当たり前の感情を持てる時間を大切に考え、安全に活いきと生活出来るように支援する」を理念としている。利用者一人ひとりへの適時適切な声掛けと傾聴の姿勢に徹した支援を共有し、そばを通るときには必ず一声かけ、不安解消を図りながら、本人の意向把握にも努めるなど実践に繋げている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響でサロンが休止中で参加できていない。	コロナ禍前までは、自治会の地域サロンに利用者に参加したり、近所の幼稚園児が年数回訪問があるなどの交流の機会があったが、コロナ禍で全く途絶えている。緊急事態宣言の解除を受けて、交流再開のタイミングや方法を模索している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍で地域との交流が無くなっている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	書面開催となっているが、現状の報告等の情報交換を行っている。意見はあまり出てこない。	コロナ禍であり、事業所での対面会議は開催できないが、各委員とはメールやFAXを通した書面での現状報告が主体であり、課題などは提示出来ていないが、意見やアドバイスなどは殆ど得られていないが、返信などで情報交換は行われている。家族アンケートなどからコロナ収束後の運営推進会議への家族参加呼びかけを検討している。	運営推進会議を活用した外部評価などで会議への家族参加はさらに重要になっています。家族アンケートからも運営推進会議への参加について、関心の高い家族数名の存在が判明しています。対面での会議再開に合わせて家族の委員への早期就任要請を期待します。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	更新申請や事故報告など限られた要件での関係となっている。	市役所へ出向く機会は少なく、提出書類も近くの東支所経由で提出するかメールや郵送が殆どであり、対面で報告したり、アドバイスを得る機会も減っている。但し、利用者、職員へのコロナワクチン接種の流れなどの必要なアドバイスは得られている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	三ヶ月に一度身体拘束適正化委員会を開催している。また、日常的ケアで気になるころはその都度話し合い確認している。安全面から玄関、ユニットの入り口の施錠をしている。	職員で構成する身体拘束適正化委員会や毎月のミーティングでは最近の事故事例などを取り上げ、再発防止に向けて徹底を図っている。事業所内を徘徊する利用者が数名おり兆候を早めに気づき、寄り添って話を聴いたり、好みのドミノ倒しなどの取り組みを促すなどして気分転換を図っている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	三ヶ月に一度虐待防止委員会を開催し、話し合い確認している。			

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、後見人制度を利用している利用者様はおらず、研修の機会はケアマネ研修等以外では設けられていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	電話や玄関先等でも質問を受け付け、ご納得いただけるまで説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	そよ風だよりを廊下やエレベーターに貼り、見て頂いている。キーパーソンへ送付し伝えられるよう心掛けている。	家族とはケアプラン作成時に電話で話をしているが、本人の健康状態に関する確認や気遣いからの要望がある程度で、意見などは殆どない。毎月の「そよ風だより」の掲載内容の充実を図り、面会出来ない家族へ安心を届けるよう努めている。利用者からの要望に応じて今年の敬老会の記念品として全員に座布団をプレゼントし、喜ばれている事例などがある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	可能な限り、要望を受け入れてもらえている。	管理者やケアマネージャーも現場にすることが多く、職員の気づきや提案に迅速に対応している。感染予防として食堂のテーブル上に置くアクリルパーテーションを職員が自作して設置したり、提案により床や手すりを一日三回消毒するなどの事例がある。休暇の申し出には柔軟に対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	センター長と面談を実施し、結果を代表者へと伝えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	日々の業務の中で新人社員にも伝わりやすいようにかみくだき、指導を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月一回の社内のグループホーム協議会で情報交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前から情報収集を行い、ご本人が安心して新しい生活を送れるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みの段階からご家族様との関係は始まっている。少しでもご家族様の力になれるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前から本人の生活を見聞きし、必要なサービスを検討しながら生活の変化に対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個別活動で各々に出来ることを手伝っていただきながら、共に生活を送っていただけるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の様子を毎月お手紙やそよ風だよりを通し伝えている。変化のあった際などは、今後どんなことが起こりそうなのかも含め都度細かく伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響で外部との関係が減っている。	コロナ禍以前はたまに親戚や知人の訪問があったが、最近では面会不可の事もあり途絶えている。日頃から本人が繰り返し発する人名や場所、固有名詞などを記録し、家族などに確認しながら、可能な時期が来れば再会を促したり、場所を訪ねるなどの支援に繋げようとしている。馴染みの訪問理美容を月1回利用している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	各々の性格などを把握し、生活を支えている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後は関係が切れてしまう事の方が多い。		

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	可能な限り意向を聞くようにしているが、困難な時は理由を本人に伝えている。	「何をしたいのか、して欲しいのか」大半の利用者は言葉での意思表示が可能であり、出来る限り意向や希望に沿うように支援している。自分の意思を適切に言葉で表現できない場合は表情や仕草、本人の性格、生活歴、家族からの情報なども参考に理念に基づいて、本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族様、前任ケアマネ、ご本人に聞き取りを行い、考え方や好みなどを把握できるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で確認している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人、ご家族様の意向をもとにスタッフ間で話し合い、本人に合ったケアプランを作成している。	計画は6ヶ月ごとの見直しを原則として、個別記録や業務日誌などを参考にモニタリングとアセスメントを行っている。毎月の定例ミーティングでは課題の確認を行っている。短期目標の進捗を重視し、個人別に出来そうな項目数点に絞り、今月の実行目標としてリビングボードに張り出し、利用者の励みに繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りや朝礼などを活用し、また、ミーティングでも話し合い、新しいケアプランに活かせるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族様、主治医と話し合い、ニーズに対応していけるよう他職種との連携に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	外部との接触がほぼないため、室内でも楽しめるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月二回の訪問診療と緊急時往診、看護師への相談など心身ともに安心して生活が送れるよう、ご家族様・ご本人・スタッフの意見をふまえ支援している。他の専門医への通院はご家族様の協力のもと続けている。	契約時に月2回の協力医の訪問診療と随時の往診が可能でクリニックの説明を行い、全員が受診している。さらに週1回の訪問歯科医の診療も利用している。訪問診療の結果などは変化があれば、家族へ連絡して情報を共有している。日頃から協力医との連携などで心身ともに安心して過ごせるよう支援に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	月二回の訪問診療時や往診時、電話での相談を行い指示を仰ぎ対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時どの程度の期間が必要か、退院時の受け入れ可能な身体状況、待機可能日数などを明確に伝え、入院中も状況確認の連絡をこまめに取るようにしている。（入院期間30日まで）		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医による終末期・看取りの診断があつてから、改めてご家族様に最期をどこで迎えるのか、施設で出来ることがどの辺りまでなのかを明確に伝えた上で「重度化した際の方針」の説明を行い同意を頂いた上で、医療者と連携し支援している。	契約時に事業所で出来ること出来ないことの説明を行っているが、主治医より終末期の診断があつてから「重度化した場合の対応・看取り対応に関する指針」に基づいて再確認を行っている。要望があれば、看取り経験の職員もおり、医師に確認のうえ、事業所での看取り支援も行っている。	終末期の支援で大切なことは兆しが見えたら早めの話し合いによる方針確認と共有、状況により揺れ動く家族の気持ちへの寄り添いです。医師の診断結果を待つのではなく、定期的な早めの方針確認と共有で本人家族の安心に繋げる支援に期待します。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	リモートでの研修が多く全ての職員となると難しい。事故発生時、その都度口頭で伝えながら進めていることが多い。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協働体制を築いている	地域の方々（民生委員、福祉委員、自治会長など）にお願いしてあるが、訓練への参加までは至っていない。	年2回（9月、2月）避難訓練を実施しているが、いずれも消防署の立ち合いはない。9月は机上訓練（2階の非常口までの誘導を中心に経路、動作確認）を、2月は利用者も参加して避難誘導、連絡網の確認など実施している。火災の際の初動（手順、役割分担）の不徹底事項などが判明し、再徹底を図っている。さらに、有事の際の避難場所の確保も課題となっている。職員連絡網の機能確認は毎回行っている。	2階のグループホームからの避難を十分に意識して、繰り返しの訓練で、消防が到着するまでの間になすべき手順、動作を全職員が身につけることを期待します。併せて、継続課題となっている、近隣住民への訓練参加の実現と有事の際の避難場所（建物）の早期確保にも期待します。

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	1人一人の性格をある程度把握し、ご本人を尊重しながらの言葉かけに努めている。	人生の先輩として敬い、個々人の嫌がる事や好きなことをわきまえて接することで人格の尊重に努めている。ため口などにならないよう言葉遣いには特に注意し合っている。トイレ介助時は必ずドアを閉めたり、宗教上のしきたりにこだわる人には誕生会やクリスマス会などの行事参加も無理強いしないなど、プライバシーを損ねないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人が決めやすいよう選択肢を多くしすぎない、またはわかりやすいようかみくだいて問いかけ、ご本人に決めてもらえるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人のペースに合わせて過ごせるよう、様子を見ながらの支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分で選べない方に関しては、好きそうな服2～3枚を見せ、表情などから読み解く。鏡の前でご本人に髪をとかしてもらおう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナ禍であり色々なところに制限がかかっているが、ご自分の前だけテーブルを拭いてもらうなど、少しでも参加して頂けるよう心掛けている。	朝食はグループホームのキッチンで職員が調理し、昼・夕食は一階の厨房専任者が調理しており、要望に応じてお粥や刻み食にも柔軟に対応している。栄養管理体制加算を取得している。一部介助2人、全介助1人で職員は介助と見守りに徹している。毎月料理教室と称して利用者と一緒におやつ作りを行い、喜ばれている。コロナ禍にあつては自分の口に入れる分だけ丸めるなど感染防止に配慮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事はおおむね同じくらいの量がとれるよう、食材をカットしたり等工夫をしながら様子を見ている。水分は1500cc/日摂れるよう種類の工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの声かけ、介助を行っている。口腔内の状態、ご本人の希望に合わせて訪問歯科診療につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	1人一人の排泄パターンや仕草などの動きに合わせて、支援している。1人でも排泄動作が行えるよう家具等の配置や声かけを行っている。	自立者3名は布パン、他の15名はリハパン又は昼用パッド併用で排泄記録により時間での声掛け誘導や意思表示による誘導など個々人に合わせた支援をしている。夜間は睡眠優先で個々人に合わせ、吸収量の違うパッドを併用しているが起きてきた人は見守り誘導をしている。居室内のテーブルなどの配置変更による動線確保や人感センサーの位置調節などきめ細かい対応で安全を確保している。午前中の体操を継続し、座位・立位などの現状維持に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食後のトイレや普段より長めにトイレに座る、水分を多めに摂取する等の取り組みを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ご本人の意向と体調に合わせて行っているが、時間帯は職員の配置の関係もあり、職員都合になっている。	入浴は3日に1回、午後3時頃から行っているが、本人の意向や体調などにより柔軟に対応している。嫌がる利用者は時間をおいての声掛けや、仲の良い人と一緒に入るなどで入浴に繋げている。時には入浴剤なども使い温泉気分を味わったり、菖蒲、柚子湯などで季節を感じる支援もしている。入浴中はゆったりした気分でも口数も多くなり、本音が聴ける貴重な場にもなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	コロナ禍で外出の機会も減り、集団レクも行いにくい状況。小規模個人活動が多く眠りも浅くなりがちであると思われる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報はどの職員でも見られるように個別にファイリングしている。日々状態確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみなど家事手伝いを通し、楽しいと感じて頂けるよう心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で思うように外出できないが、マスクを着け車であじさいを見に出かけたりと行事で行っているが、個人では行っていない。	コロナ禍の為、日常的な近所の散歩や家族との夕食などは出来ていないが、ドライブで桜、紫陽花、彼岸花など季節の花を車中より眺め、気分転換を図っている。駐車場で花火やバーベキューなど、時には外気に触れる機会を作っている。気候も良く、緊急事態宣言も解除になったが、感染対策に一層注意しながら徐々に近所への散歩など、外出支援の再開を予定している。	

自己	外部	項目	自己評価（スミレユニット）	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭を一括管理している。ご本人の欲しい物、必要な日用品の買い物は職員が代行している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話が来た際はご本人に取り次いでいる。手紙が届いたらご本人にお渡ししている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	定期的に清掃・消毒を行っている。また、清掃時転倒に気を付けている。	リビングダイニングは車椅子や歩行器などでの移動の動線に配慮してテーブルや大型テレビ、ソファを配置している。洗面台には季節が感じられるようススキなど季節の花を飾っている。各ユニットの廊下には日常の生活の様子やイベントの写真が満載の「そよ風だより」を掲示し、生活感が感じられようになっている。感染症対策として、こまめに換気を行ったり、次亜塩素酸を使用して床清掃などを行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間では少し離れたところにソファがあり他者の様子がわかりにくくゆったりと過ごせるため、疲れた時などにはソファで過ごすよう勧めることもある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室で過ごす時間も設けられるよう、可能な限りは声かけをしている。	全室洋間でクローゼットと室内の壁際に作り付けの棚があり、ベッドは備付となっているが持ち込みも可となっている。家族の写真、位牌、自作の油絵など思い思いの品を持ち込んでいる。換気は毎日数回、床消毒は一回行っている。整理整頓は利用者と相談しながら必要に応じて職員が手伝っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	1人で行える方はご自身で、そうでない方は職員が声をかけ整えている。		